

第 17 回 徳島乱歩（その 2：川島城址、川田まんぢう、及び真鍋代議士の銅像）

筆者：林 久治 （記載：2016 年 11 月 1 日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気侷な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

私のメル友「HARUKO さん」は、「HARUKO の部屋」という人気サイトを開設している（[1）のサイト/1](#)）。彼女のサイトには、「行きあたりばったりの銅像めぐり」という欄があり、国内外の有名な銅像を訪問して、ウィットに富んだ紀行文を掲載している。HARUKO さんの銅像仲間に「ヒロ男爵」という高貴な方がおられる。彼のサイト「銅像探偵団」（[2）のサイト/1](#)）は、日本全国の銅像をすべて制覇することを最終目的としているそうである。

そこで、偏屈老人の私（筆者の林）としては、「銅像探偵団」にはない銅像を意地でも探してやろう、と言う気持ちになっている。出来れば、全くバージンの銅像を発見して、ヒロ男爵に「ギャフン」と言わせたいのであるが、それはなかなか困難である。そこで次善の策として、ネット上に掲載されている銅像の中で、「銅像探偵団」にはない銅像を「ヒロ男爵」に伝達することも、私の「乱歩」の対象としている次第である。

本年の 10 月に、私は徳島の実家に久しぶりに帰郷したので、「銅像探偵団」にはない銅像を徳島で探索することも、今度の徳島乱歩における目的の一つとした。前回は（[前回の記事/1](#)）「五宝翁太郎先生」の銅像を紹介した。今回は、「真鍋勝代議士」の銅像を紹介する。そのついでに、「川島城址」と「川田まんぢう」も紹介する。

（2）吉野川

真鍋勝代議士は吉野川の「美馬橋」架橋に尽力された人物である。真鍋代議士を紹介する前に、徳島県の「吉野川」を紹介しよう。（なお、奈良県の吉野川も有名である。本記事では、徳島県の吉野川を対象とする。）吉野川は「四国三郎」の異名を持つ、四国一の大河である。吉野川の鳥瞰図を次ページの図 1 に示す。

現在は、吉野川には多数の橋が架かっている。しかし吉野川は大河なので、昭和初期までは橋がなく、兩岸の交通は渡し舟が使われていた。徳島県に電車がいないのは、「大河・吉野川に橋を架ける費用がかさむため、私営の電鉄会社が設立されなかった」ことも一因であろう。本格的な橋梁の建設は、国により昭和初期から始まった。以下に、吉野川の橋を建設順に記載する（それらの場所を、図 1 に示す）。

- ①三好橋（開通：1927 年、橋長：244m）
- ②穴吹橋（開通：1928 年 4 月、橋長：416m）
- ③吉野川橋（開通：1928 年 12 月 18 日、橋長：1071m）
- ④高德線・吉野川橋梁（開通：1935 年 10 月、橋長：949.2m）

⑤土讃線・第2吉野川橋梁（開通：1935年、橋長：249m）

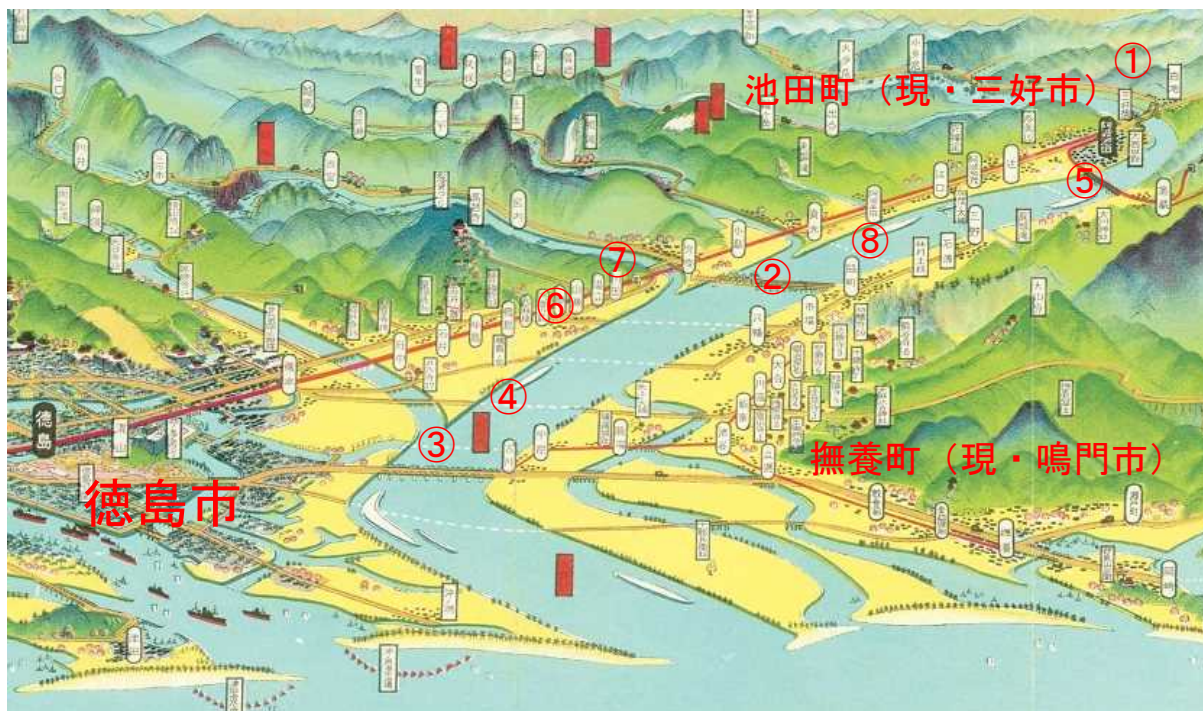


図1. 吉野川の鳥瞰図（昭和5年頃）昭和初期に吉野川に架かる橋（建設順）：①三好橋、②穴吹橋、③吉野川橋、④高德線・吉野川橋梁、⑤土讃線・第2吉野川橋梁。なお、⑥は「川島城址」、⑦は「JR川田駅」⑧は現在の「美馬橋」の位置である。（本図は、[3](#)）のサイト/より借用。）

（3）川島城址

私（筆者の林）は、[前回の記事/f](#)で書いたように、本年10月16日の朝に、徳島市南二軒屋町に行き、五宝先生の銅像を調査した。そこから、美馬橋に行ったのであるが、途中で川島城址（図1の⑥）に寄り、川田駅前（図1の⑦）で「川田まんぢう」を買った。先にそれらを紹介する。図2に、吉野川の川島付近の地図を示す。



図2. 川島付近の吉野川 ⑥が「川島城址」の場所。「阿波川島駅」の次が「入学の切符」で有名な「学駅」である。

図2に示すように、川島城（図1の⑥と図2の⑥）は吉野川に突き出た「岩の鼻」と呼ばれる断崖上に築かれた要害堅固な城であった。ここの河原の海拔は18mであるが、城山の海拔は52mである。川島町は川島城の小さな城下町として発展し、この付近（麻植郡）の政治の中心地であった。2004年10月1日に、麻植郡の町村が合併して「吉野川市」が発足した。市役所は経済の中心地の旧・鴨島町に置かれている。



図3. 川島城 上：天守閣、下左：天守閣より吉野川の上流（三好市方向）を望む（背景の山は、「阿波富士」として有名な「高越山」、海拔は1133m）、下右：天守閣より吉野川の下流（徳島市方向）を望む。

[4\) のサイト/](#)を参考にして、川島城の略歴を以下に記載する。

天正年間(1573年～1592年)初期：三好長慶の一族・川島兵衛進惟忠が川島城を築城したと言われる。

天正7年(1579年)：川島惟忠は、阿波に侵攻して来た長宗我部軍との「[脇城外の戦い](#)」（岩倉合戦とも言われる）で、多くの三好家臣と共に討死した。長宗我部氏は四国統一の直前で、秀吉に敗退し、土佐一国を安堵された。

天正13年(1585年)：阿波国に蜂須賀家政が入封すると、阿波の要地九城（阿波九城：図4を参照）に重臣を配置して、阿波支配の拠点とした。川島城には林能勝(道感)が兵300人、五千五百石で入城した。林能勝は城下に町を作り、それが川島繁栄の基となった。

元龜3年(1638年)：[一国一城令](#)により川島城は廃城となるが、その跡には徳島藩の奉行所が置かれ、明治になるまで存続した。

1981年：二の丸跡に観光用の模擬天守閣「レストハウス川島城」が建設された。



図4．蜂須賀時代初期
（1585-1638）の阿波九城

本図中に、赤文字と赤点で示されている九城が、蜂須賀家の阿波支配の拠点となった。本図は、[5\) のサイト/m](#)より借用。なお、阿波九城の説明や写真は、[6\) のサイト/1](#)が優れている。

[5\) のサイト/m](#)によれば、阿波九城の名称と城代・石高は次の通りである。①一宮城（益田宮内少輔持正・石高不明）、②岡崎（撫養）城（益田内膳正忠 3593石→益田大膳正利 5000石）、③西条城（森監物 5500石）、④川島城（林図書助能勝（後道感） 5500石）、⑤脇城（稲田左馬亮植元 10000石→稲田修理亮示植 14000石）、⑥大西（池田）城（牛田掃部尉一長 5300石→中村右近太夫重友）、⑦牛岐（富岡）城（細山帯刀（⇒賀島主水正）政慶 10000石）、⑧仁宇（和食）城（山田織部正宗重 5000石）、⑨鞆（海部）城（中村右近太夫重友 5254石→益田宮内一政 7000石→益田豊後長行 7500石）。

さて、問題の「林能勝（はやし よしかつ、1534-1616.3.23）」であるが、ウィキペディアによれば、彼の略歴は次の通りである。「尾張国上林村出身。先祖は木曾義仲で、子孫が上杉村に移り住み性を林に改めたと云われている。今倉左馬助に仕え、後に織田信長に仕える。本能寺の変後は、蜂須賀正勝に仕え、四国征伐等に従軍した。1586年、蜂須賀家政が阿波国へ入り、能勝も蜂須賀家の家臣として阿波九城のひとつである川島城番の役職を与えられた。また徳島城で武市信昂と共に奉行を務めた。その後、九州征伐、

朝鮮出兵に従軍、1596年に隠居して道感と号する。しかし大坂冬の陣には81歳の高齢で従軍、戦功があり黄金百両を賜った。」

私の第一の疑問は、「林通勝（はやし みちかつ）」と「林能勝」との関係である。林秀貞（別名は林通勝、佐渡守と名乗る）は周知の通り、幼少の織田信長の筆頭家老であった。林通勝は1580年8月、信長から24年も過去の信勝擁立の謀反の罪を問われて追放された。この追放劇に関しては理由が24年も前の事柄であるため余りにも難癖じみており、その真相については不明な点が多い。しかし、林通勝の追放が、「本能寺の変」の原因の一つになったことは明白である。「林能勝」と「林通勝」とは名前がよく似ているので、両者に血縁関係があったのかもしれない。これまで、私がいくら調査しても、「林能勝」と「林通勝」との関係は不明である。

私の第二の疑問は、「林能勝」は私が生まれた「林家」のご先祖様であるかどうかである。私の先祖「林家」も蜂須賀家の家臣であった。私はこの点を調査して、その結果を[7\)のサイトA](#)に書いた。結論を簡潔に書けば以下の通りである。①私の先祖である林重十郎は、文久元年（1861年）に三人御扶持方御支配八石を拝領していた。②我が林家は、徳島藩で有名な林能勝の直系の子孫ではない。③徳島藩には36家もの林家が存在した。従って、私は「林能勝を頭とする林一族が、徳島藩に多数仕えていたのではないか。私の先祖の林家も、その一族に属していたのではないか」と考えている。

（4）川田まんぢう

私は川島城跡（図1の⑥）を見物した後、美馬橋（図1の⑧）に向かった。その途中で、「川田駅」（図1の⑦）近くの国道で、「川田まんぢう」の店舗（図5を参照）を見つけた。私は懐かしさの余り、饅頭（図6を参照）を購入した。



図5. 「川田まんぢう」の店舗、

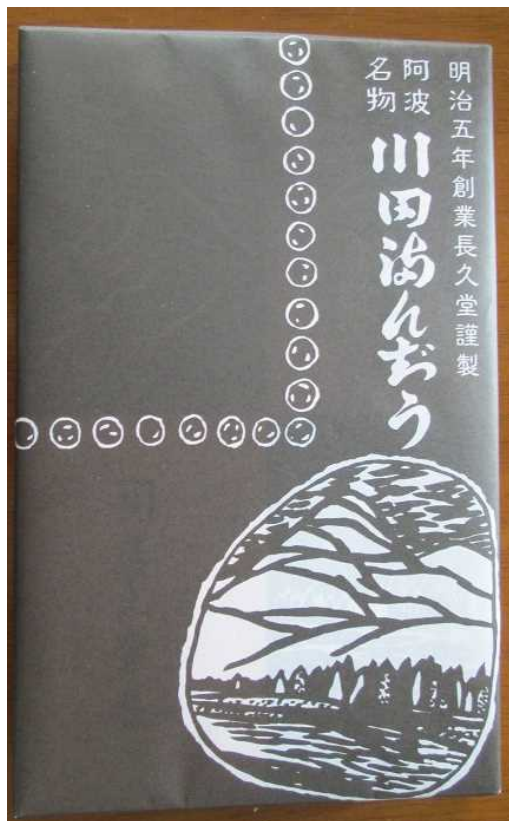


図6. 川田まんぢう

左：「川田まんぢう」の包装

右：「川田まんぢう」の中身

値段は、4ケ入りが150円、24ケ入りが630円、48ケ入りが1260円である。

「川田まんぢう」は無着色で甘さが上品な一口サイズの饅頭である。



私は「[8](#)」の[サイト/f](#)で、次のような文章を書いている。

私の少年時代の1950年台には、徳島本線には蒸気機関車に牽引された列車が走っていた。現在は、徳島—阿波池田の間(74km)は、特急「剣山」で75分位である。1950年台には、徳島—阿波池田の間は汽車で2時間以上かかった。停車時間も長かったので、主要駅では売り子がホームで飲食物を販売していた。私が記憶しているのは、「石井駅」の「ふぢ餅」と、「穴吹駅」の「ぶどう饅頭」である(それらの写真を、[8](#)の[サイト/f](#)に示した。)

私は、「ふぢ餅」と「ぶどう饅頭」のことは憶えていたが、「川田まんぢう」が「川田駅」で販売されていたことをすっかり忘れていた。製造元の長久堂のHP([9](#)の[サイト/f](#))によれば、長久堂の創業は1872年である。「ふぢ餅」の「岡蔓本舗」の創業が1902年で、「ぶどう饅頭」の「日之出本店」の創業が1914年であるので、長久堂が少し古い。現在、これらの3老舗が徳島の田舎で健在であることは、大変心強い。

なお、私の少年時代の1950年台には、麻植郡川田町(現・吉野川市山川町)は高越銅山と川田手すき和紙で繁栄していた。

(5) 美馬橋と真鍋勝代議士の銅像

私は、川田駅前(図1の⑦)の長久堂から、穴吹橋(図1の②地点)に行った。現在の穴吹橋(1990年完成)の架橋前、上流約500mの地点に同名の橋が架かっていた。この旧穴吹橋(1928年完成)は吉野川に2番目に架けられたモダンな感じの橋であった。旧橋の一部は美馬市内で歴史的遺産として保存されている。

穴吹橋から更に吉野川を溯って、美馬橋（図1の⑧）に着いた。美馬橋付近の吉野川の地図を。図7に示す。美馬橋の着工は1951年で、開通は1959年4月4日である。橋長は417.7mで、右岸は美馬郡つるぎ町（旧・半田町）で左岸は美馬市美馬町（旧・美馬郡郡里町）である。（本文は9ページに続く。）



図7. 美馬橋付近の吉野川 図1と図7の⑧は、現在の「美馬橋」。



図8. 吉野川右岸（南側）の「真鍋勝君寿像」から見た「美馬橋」。橋の左岸（北側）は美馬市美馬町喜来の市街である。なお、美馬橋の綺麗な動画は、次のサイト（<https://vimeo.com/131103844>）でご覧になれます。

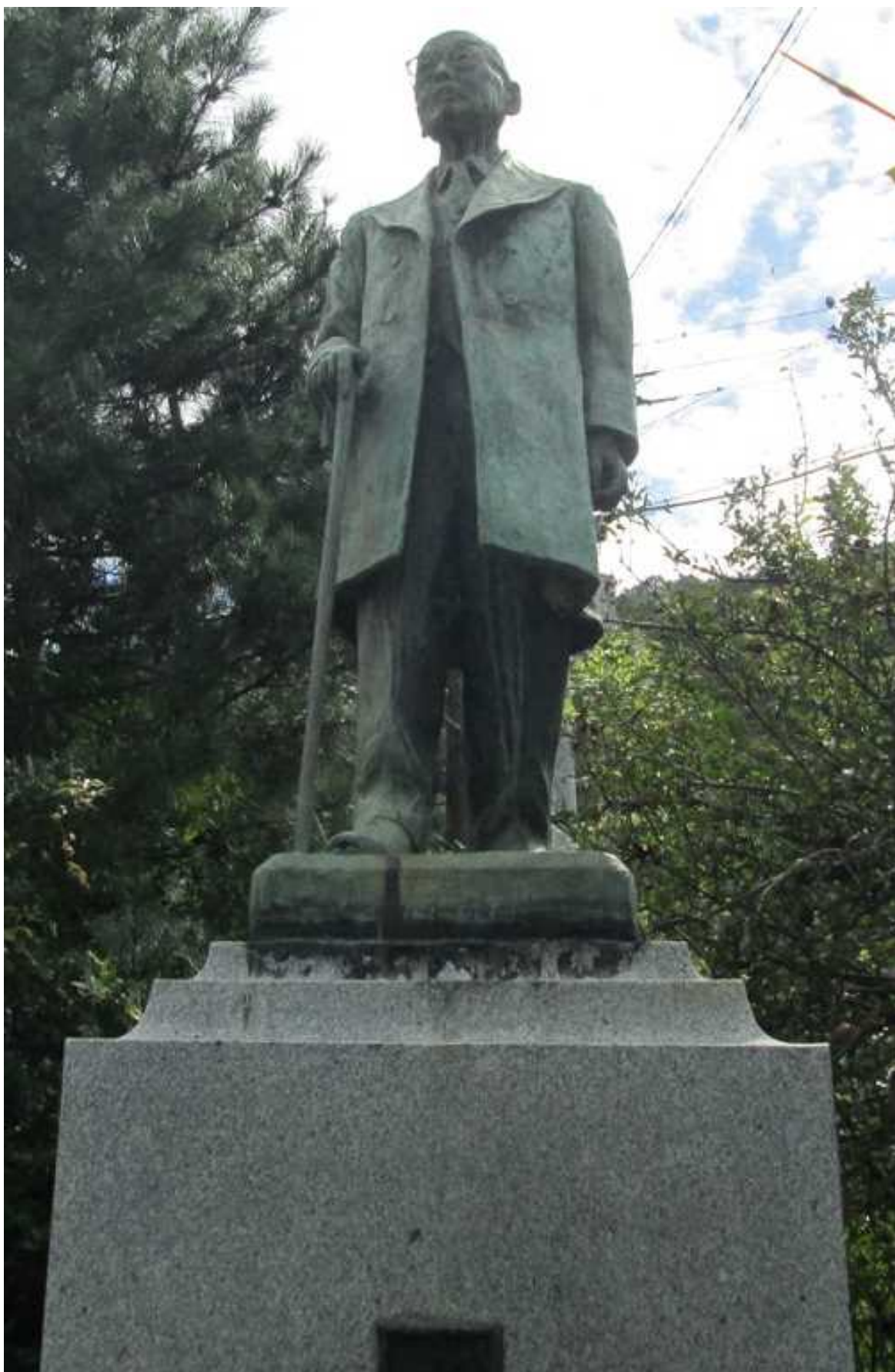


図9. 真鍋勝代議士の銅像は、美馬橋南側の国道脇にあった。

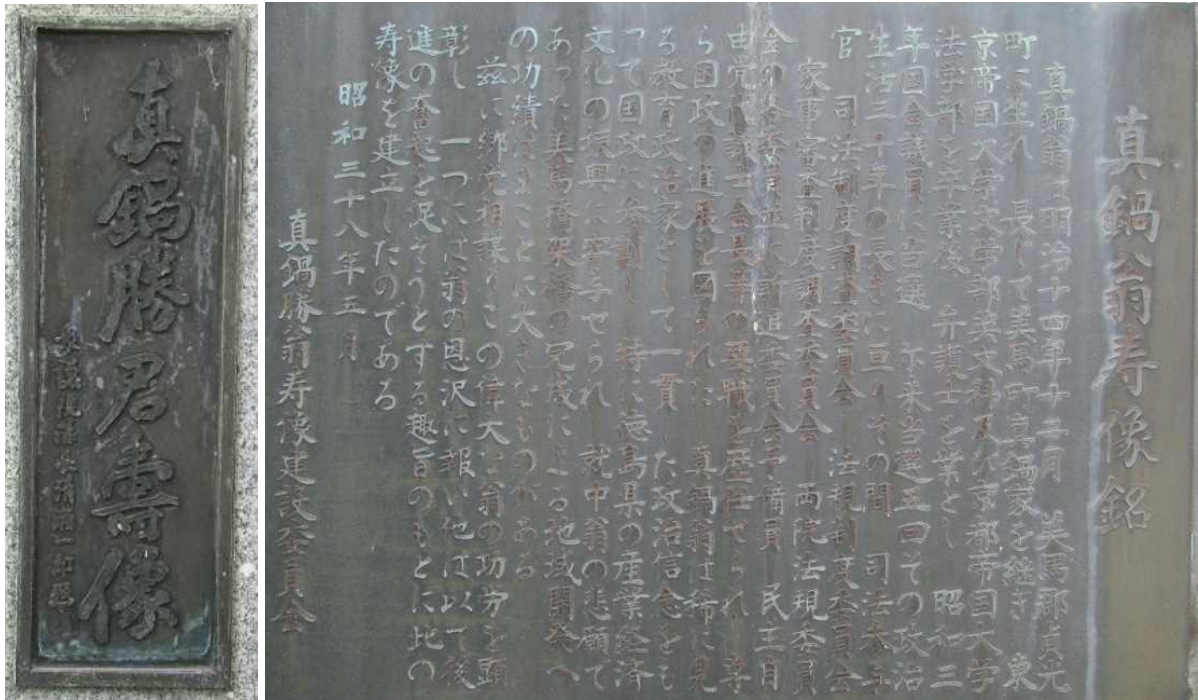


図 10. 真鍋勝代議士の銅像の台座の銘 左：正面、右：裏面。

真鍋勝代議士の銅像は、美馬橋南側の国道脇にあった。その全体像を、図9に示す。銅像は北向きで、逆光のため正面像は明瞭には撮影できなかつた。銅像の台座に彫られた銘を、図10に示す。台座正面の銘には、次のように書いてあった。

真鍋勝君壽像 衆議院議長清瀬一郎題

台座背面の銘は風化して読み難いが、何とか次のように読めた。

真鍋翁寿像銘

真鍋翁は明治十四年十二月 美馬郡貞光町に生まれ 長じて美馬町真鍋家を継ぎ 東京帝国大学文学部英文科及び京都帝国大学法学部を卒業後 弁護士を業として 昭和三年国会議員に当選 以来当選五回その政治生活三十年の長きに亘りその間 司法参与官 司法制度調査委員会 法制制度委員会 家事審査制度調査委員会 両院法規委員会の各委員並びに訴追委員会予備員 民主自由党代議士会長等の要職を歴任され専ら国政の進展を図られた 真鍋翁は稀に見る教育政治家として一貫した政治信念をもって国政に参画し 特に徳島県の産業経済文化の振興に寄与され 就中翁の悲願であった美馬橋架橋の完成による地域開発への功績はまことに大きなものがある

茲に郷党相謀りこの偉大なる翁の功労を顕彰し 一つには翁の恩沢に報い他は以て後進の奮起を促そうとする趣旨のもとに此の寿像を建立したのである

昭和三十八年五月 真鍋勝翁寿像建設委員会

なお、「茲に」は「ここに」と読む。私は、真鍋翁の銅像を見て銘文を読んで、次のような感想を持った。

「真鍋翁は徳島の美馬郡という片田舎で、抜きんでた秀才として誕生した。翁は東京と京都の両帝大を卒業するという当時としては破格の学業を達成した。その後、翁は弁護士として代議士として活躍した。翁の業績の一つが美馬橋の完成であり、その成果の故にこの地に銅像が建っている。翁の没後、半世紀以上の年月が経過した。現在、翁の銅像はこの地で風化しており、（翁の一族以外の）一般の徳島県民は、翁の業績だけではなく翁の存

在すら忘れ去っている。行く川の流に、かつ結びかつ消え去る泡の如く、人の命は儚い。しかし、地球上の全生命体の DNA は、源流から大河に成長するように、最初のご先祖様から 40 億年の長きにわたって寿命を保ちつつ進化している。そういう意味で、地球上の全生命はみな兄弟姉妹である。そして、個々の個体は川の泡のようにはかない存在ではあるが、DNA という大河に参画したという意味で、その存在意義は尊い。」

ここで、真鍋勝代議士の経歴を、wikipedia より簡潔に紹介する。

真鍋勝（1881. 12. 24-1963. 6. 7）は徳島県美馬郡貞光村（現・つるぎ町）に武田嘉六の子として生まれ、真鍋儀平の養子となった。1915 年に東京帝国大学文学部英文科を卒業、1923 年に京都帝国大学法学部を卒業後、弁護士を開業。1928 年、第 16 回衆議院議員総選挙に出馬し、当選。第 20 回まで 4 回当選を果たした。その間、阿部内閣で司法参与官を務めた。戦後は第 24 回衆議院議員総選挙に当選した。真鍋勝翁の選挙結果は次の通りである。

第 16 回衆議院議員総選挙（1928. 2. 20）：真鍋勝（立憲民政党）徳島 2 区（板野郡、阿波郡、麻植郡、美馬郡、三好郡：定員 3 名）で 2 位当選

第 17 回衆議院議員総選挙（1930. 2. 20）：真鍋勝（立憲民政党）徳島 2 区（定員 3 名）で落選

第 18 回衆議院議員総選挙（1932. 2. 20）：真鍋勝（立憲民政党）徳島 2 区（定員 3 名）で 3 位当選

第 19 回衆議院議員総選挙（1936. 2. 20）：真鍋勝（立憲民政党）徳島 2 区（定員 3 名）で 2 位当選

第 20 回衆議院議員総選挙（1937. 4. 30）：真鍋勝（立憲民政党）徳島 2 区（定員 3 名）で 1 位当選

第 21 回衆議院議員総選挙（1942. 4. 30）：徳島 2 区（定員 3 名）、秋田清（翼賛推薦）14788 票 1 位当選、三木与吉郎（推薦）12654 票 2 位当選、三木武夫（非推薦）12252 票 3 位当選、三木熊二（推薦）10522 票 4 位落選、真鍋勝（非推薦）9962 票 5 位落選。

第 23 回衆議院議員総選挙（1947. 4. 25）：真鍋勝（日本自由党）徳島全区（定員 5 名）で 6 位落選

第 24 回衆議院議員総選挙（1949. 1. 23）：真鍋勝（民主自由党）徳島全区（定員 5 名）で 2 位当選

第 25 回衆議院議員総選挙（1952. 10. 1）：真鍋勝（自由党）徳島全区（定員 5 名）で 8 位落選

第 27 回衆議院議員総選挙（1955. 2. 27）：真鍋勝（自由党）徳島全区（定員 5 名）で 7 位落選

なお、第 21 回総選挙（所謂、翼賛選挙）の結果は、[10\) のサイト/f](#)より引用。

最後に、美馬橋にまつわる悲しい話を紹介します。[11\) のサイト/l](#)には、次のような記事があります。

「橋ができる前、兩岸の行き来は、いくつかの渡し舟で行われていました。一九四九（昭和二十四）年五月、その一つの道万の渡しで舟が転覆。遠足中の児童十一人が亡くなるという事故が起こったのです。当時、吉野川流域各地では架橋の要望がありましたが、この事故でこの地域の要望はいっそう高まりました。」

一方、[12\) のサイト/l](#)には、次のように記載されています。「昭和 24 年（1949）3 月、芝坂小学校児童 10 人が道万渡しで遭難するという痛ましい事故が、この橋の架設の

きっかけとなった。」しかし、[12\) のサイト/](#)が掲載している「美馬橋碑記」（図 11 を参照）には「昭和 27 年 5 月 17 日小学校生徒十一人溺水……」との記載がある。

芝坂小学校のHPには「追悼の日は、昭和 24 年 5 月 17 日に芝坂小学校の 4・5・6 年生が、旧国鉄を使って、小松島まで遠足に行くため、吉野川を渡し船で渡っている途中、船が転覆し、10 名の児童が亡くなった事故を悼むために設けられました。」との記事がある。このように、サイトによって、水難の月日と人数が違っている。真相は「水難の日は昭和 24 年 5 月 17 日で、犠牲者は 10 名」が正しいようだが、異説の原因は何であろうか？



図 11. 美馬橋碑記

[12\) のサイト/](#)に掲載されている写真を借用。

引用したサイト

- 1) のサイト：<http://cosmos.moo.jp/index.html>
- 2) のサイト：<http://www.geocities.jp/douzouz/>
- 3) のサイト：<http://www.t.bunri-u.ac.jp/human/media/archive/32-2/>
- 4) のサイト：<http://www.hb.pei.jp/shiro/awa/kawashima-jyo/>
- 5) のサイト：<http://sirakawa.b.la9.jp/S/Awa.htm>
- 6) のサイト：http://basie.mobi/gall_3/awa9.html
- 7) のサイト：<http://www015.upp.so-net.ne.jp/h-hayashi/M-2.html>
- 8) のサイト：<http://www015.upp.so-net.ne.jp/h-hayashi/D-22.pdf>
- 9) のサイト：<http://kawata-manju.com/>
- 10) のサイト：
http://m-repo.lib.meiji.ac.jp/dspace/bitstream/10291/17532/1/seijigakuronshu_37_1.pdf
- 11) のサイト：<http://1st.geocities.jp/yoshinogawawatashibune/hashi.html>
- 12) のサイト：<http://www.pref.tokushima.jp/bridge/docs/2015021000128/>